

## 終末期看護における基礎教育に関する文献的考察

園田麻利子, 上原充世

### 要 旨

終末期看護における基礎教育の実態を知り課題を明確にすることを目的に文献による考察をした。その結果以下のことが言えた。

1. 「医学中央雑誌」の1999年から2008年までの過去10年間の文献で「看護教育」と「終末期看護」をキーワードとして検索した結果54件が検出された。その中で対象が看護学生であり、原著である19件を分析した。
2. 19件の研究概要では、死や終末期看護に関する学生の認識を示した研究が68.4%, その内訳は実習に関連したものが47.4%, それ以外のものが21.0%であり、実習に関連した研究が多かった。そして、終末期看護における教育的介入後の学生の実態と教育効果を示した研究が31.6%であり、教育的介入に関する研究は少なかった。
3. 学生は、終末期看護の実習で患者・家族への看護の実際を体験することによって学ぶことが多かった。
4. 基礎教育では、終末期看護に関して体系的な教育の必要性は論じられ実施されているが、教育方法・内容・評価は模索の段階である。

キーワード：看護基礎教育, 終末期看護, 実習, 教育方法

### I. はじめに

近年、がん対策基本法の成立、尊厳死などが取りざたされることが多く、終末期医療・看護について注目されている。これは、高齢化が進み3人に1人ががんで死亡している今日、患者・家族からみると豊かな自分たちの人生・死を迎えたいという願望を示すものであり、また医療従事者にとっては、患者・家族に対してQOL(Quality of life 生活・生命の質)を高め、その人らしい人生や最期を迎えて欲しいことを示すものである。しかし、現状は厳しく、理想と現実で揺れ動きながら悩み・苦しみの中で模索が続いているように思われる。そして、長寿化・疾病構造の変化の中で患者・家族と医療者側の願いがぶつかり、終末期医療・看護の問題

を大きくしていると考えられる。

谷<sup>1)</sup>は現在の我が国における末期医療では、患者に対する全人的な配慮が欠けていることが少なくない。臨死患者の末期が悲惨なのは、患者も医療者も臨死を否定し、死を認めないこと、末期の苦痛緩和の医療が不十分であること、末期の対症療法を支えるケアが不足していること、残された患者の生活の質を豊かにするための配慮が不足していること、患者家族の悲哀、離別、哀悼などに対するアプローチが不足していることなどの要因によるものと考えられる。そうした反省に立って、臨死患者が、平和で尊厳を保ったおだやかな死を迎えることができるような援助、ケアをするためには、医療者がターミナル・ケアについての認識を深め、心身医療について学び、当面の医学知識を豊かにし、対症療法的に必要な医療技術を向上し、患者との

関係を信頼関係に置くための態度がとれるような訓練が必要である。そうした勉学は、卒業後の短期間の臨床実習によって行うだけではまったく不十分で、卒業前の医学教育のなかで、長い年月をかけて修得すべきものであると述べている。

また、将来看護師となる看護学生に対しても学生である基礎教育の時代から終末期医療・看護に対する教育が必要である。藤枝<sup>2)</sup>は看護学生に対する死の準備教育としては、二つの面から考える必要があると思う。一つは、看護学生といえども現代社会に生きる人間であり、現代に生きる一般学生たちとまったく同じであることから、人間として自分のための死への準備教育が必要であり、もう一つの面は、職業人として人の生命を守るとともに、死を迎えなければならない人々のケアをしなければならない立場になるための準備であると述べている。古市<sup>3)</sup>は終末期患者の看護は死にゆく患者の生きるプロセスに関わるため、常に看護師の死生観が問われ続けている。そのため、終末期看護における教育では青年期にある学生が死生観を育成し、終末期にある患者を理解することが重要となってくると言っている。また、木澤<sup>4)</sup>は看護学生で、将来、ホスピスや緩和ケア病棟で働きたいという希望をもっている者も多く、看護大学における終末期看護学教育への責任は大きいとも述べている。

しかし、平均寿命の延長や核家族化が進み、終末期を病院で過ごし死亡するケースが多いことから、若者が終末期にある人に遭遇するあるいは死別体験をする機会が少なくなっている。このような時代背景に看護学生も立たされている。

以上のことより、終末期看護への基礎教育の必要性が叫ばれ、その教育のあり方についてはさまざまな意見が出されている。看護学生に対

する終末期看護について研究され始めたのは、1980年代頃からである。それは、看護学生の死生観<sup>5)</sup>・死生観形成<sup>6)</sup>・学生の死に関する調査<sup>7)</sup>・<sup>8)</sup>・「死の教育学」の実践例<sup>9)</sup>や死のイメージの変化<sup>10)</sup>に関して調査研究がされてきた。また、丹下<sup>11)</sup>は終末期看護に関する教育活動は、死について考える動機づけや問題提起、終末期患者に対するケアの強化を図る教育の必要性が示唆されると述べている。そこで、今回は、看護学生における終末期看護における教育に関する先行研究について検討した。そのことにより終末期看護に関する基礎教育の実態を知り課題を明確にしたいと考える。

## II. 方 法

### 1) 対象となる文献の選択

1999年から2008までの過去10年間の「看護教育」と「終末期看護」をキーワードとした研究論文のオンライン検索(医学中央雑誌)を行い54件が概当した。

2) この54件の文献の中から研究の対象が看護学生であり原著である19件を分析対象とした。文献の内容をもとに看護学生に関する終末期看護への教育の実態を検討した。

## III. 結 果

### 1. 過去10年間の終末期看護における看護教育に関する文献の概要

対象となる文献は54件であり、その結果を表1に示す。1999年は2件、2000年は4件、2001年は4件、2002年は4件、2003年は5件、2004年は6件、2005年は18件、2006年は2件、2007年は7件、2008年は2件であった。論文の種類からみると、原著論文24件、会議録26件、解説4件であった。

その原著論文24件の内訳は、19件が看護学生を対象としたもの、5件が看護師を対象と

したものであった。対象が看護師であるものの内訳は、看護師の終末期患者との良いかわりかた 1 件 (2008 倉持<sup>12)</sup>、看護師のキャリア発達の意識と継続教育 1 件 (2005 兼宗<sup>13)</sup>、看護職者の体験分析 (2000 吉田<sup>14)</sup>) 1 件、「その人らしさを尊重した看護」に関する看護婦の意識 (1999 岡部<sup>15)</sup>) 1 件、救命領域で死にゆく患者・家族に関する看護婦のジレンマ (1999 川瀬<sup>16)</sup>) 1 件であった。

会議録 26 件は、全て看護学生が対象であり、実習に関連するものが 21 件であった。その内訳は終末期看護実習での学びと課題 12 件 (2006 岩瀬<sup>17)</sup>、2007 原<sup>18)</sup>、2008 原<sup>19)</sup>、2006 糸島<sup>20)</sup>、2005 稲本<sup>21)</sup>、2005 羽毛田<sup>22)23)</sup>、2005 中村<sup>24)</sup>、2004 金子<sup>25)</sup>、2003 茶園<sup>26)</sup>、2003 岩瀬<sup>27)</sup>、2002 茶園<sup>28)</sup>) であった。次は、終末期看護学実習における看護学生の困難・対処方法 4 件 (2007 竹内<sup>29)</sup>、2004 岩瀬<sup>30)31)</sup>、2002 岩瀬<sup>32)</sup>) であった。また、看護基礎教育における終末期看護実習の成果 (2003 茶園<sup>33)</sup>) 1 件、看護学生の終末期看護演習・実習での変化と影響要因 (2008 茶園<sup>34)</sup>) 1 件、終末期看護における看護学生の実習修得度と共感性の関連 (2004 寺田<sup>35)</sup>) 1 件、終末期看護における看護学生への実習指導の在り方 (2004 新井<sup>36)</sup>) 1 件、終末期看護学実習における教員の役割 (2005

澤井<sup>37)</sup>) 1 件であった。そして、実習と学内を絡めたものが 1 件であり、終末期看護に関する学内演習・臨床実習の意義 (2004 茶園<sup>38)</sup>) であった。講義など実習外のものでは 4 件であり、講義内容の検討 (2005 山田<sup>39)</sup>)、授業「終末期看護」前後の終末期のイメージ (2003 三好<sup>40)</sup>)、終末期看護における授業展開 (2002 木下<sup>41)</sup>)、看護学生の死の不安の認知 (2000 本間<sup>42)</sup>) であった。

以上のことから原著・会議録においても看護学生を対象として書かれた文献が 43 件 (83.3%) で多く、看護師を対象とした文献は 5 件 (9.3%) であった。

## 2. 「看護教育」「終末期看護」に関する文献で対象が看護学生である 19 件の研究概観

「看護教育」「終末期看護」に関する文献で対象が看護学生であるものは、原著 19 件 (35.2%)、会議録 26 件 (48.1%) であった。そのうち今回は原著である 19 件を分析し、表 2 に研究の概要を示した。

### 1) 研究対象

看護大学もしくは短期大学、専門学校の 3 年生を対象としたものが 12 件、1 年～3 年までを対象としたもの 5 件、4 年生を対象としたものが 1 件、卒業生を対象としたものが 1 件であった。

表 1 「終末期看護における基礎教育」に関しての文献数の収録年推移

論文の種類 / 収録年	原 著		会議録		解説 / 特集	合計
	学 生	看護師	学 生	看護師		
論文内容の対象者						
1999	0	2	0	0	0	2
2000	1	1	1	0	1	4
2001	4	0	0	0	0	4
2002	1	0	3	0	0	4
2003	1	0	4	0	0	5
2004	2	0	4	0	0	6
2005	7	1	7	0	3	18
2006	0	0	2	0	0	2
2007	3	0	4	0	0	7
2008	0	1	1	0	0	2
合 計	19	5	26	0	4	54

表 2 対象とした研究の概要一覧

研究者名 (研究年度)	研究対象	研究方法	研 究 結 果
1. 安藤恵子他 (2007)	A 看護学校 2 年生 (3 年課程) 16 名	成人看護学終末期実習の終了後の「実習を通して学んだこと」のレポートの KJ 法による分析	実習を通しての学生の学びの 8 つのカテゴリー： (1) 患者の心理的苦痛 (2) 患者と共にいる (3) 患者をうけいれる (4) 身体的苦痛に対する援助 (5) その人らしさ (6) 患者を支える (7) 家族の苦痛 (8) できなかった自分
2. 穴澤加代子他 (2007)	A 看護専門学校 (3 年課程) にて終末期看護実習を終了した卒業生で心理面への援助ができた学生 3 名	非構造化面接時の面接内容の解釈	(1) 学生の学習の過程は、〈恐れ〉がある→〈恐れ〉が減る→患者の世界を理解し、ケア行動へ→ケアを体得と進んでいた。 (2) 変化をもたらした要因： ①〈恐れ〉への変化はありのままの患者を受容でき、患者から自分の存在を承認されたこと。指導看護師・教員による心理的サポートがあったこと。 ②③により患者を個性ある人とみれるようになるとケア行動を起こし、その成功体験により患者に合ったケアの意味の学習ができたこと。
3. 糸島陽子他 (2006)	3 年課程看護短期大学の 1 年次 52 名、2 年次 47 名、3 年次 51 名の 150 名	自記式無記名の質問紙によるアンケート調査	学生の死に対する考えと終末期看護への関心： (1) 死別体験や学年間により、死に関する講義希望や終末期看護への希望に差はない。 (2) 「生や死」「終末期看護」への興味や関心は、死別体験や年齢に伴い受動的に得られるものではない。学生が感じたことを言語化させるなどの教育的配慮が必要である。
4. 新谷奈苗他 (2005)	看護大学看護学科 3 年生 104 名	実習前後のアンケート調査 (1) 「終末期において大切だと考えられるケア」 (2) Steinhauser による 9 つの質問	(1) 終末期に学生が大切だと考えるケア ①身体的ケア：痛みがないこと、意識がしっかりしていること、呼吸困難に陥らないこと ②精神的ケア：話を聞いてくれる人がいること、死にゆくことへの自分の個人的恐怖を語ること、一人きりで死なないこと、ユーモアのセンスを失わないこと ③霊的ケア：神(仏)に全てを託すこと、祈ること、他の人の助けになることが出来ること (2) 実習後に大切だと思う項目：痛みがないこと、意識がはっきりしていること
5. 佐々木順子他 (2005)	看護学生 3 年生 8 名	テープ、自由記載内容から学習内容を抽出したものの分析	成人看護学実習における「終末期にある患者及び家族の全人的苦痛への援助」のカンファレンス指導案にそって実施した後の学生の学び： (1) 学生は、全人的苦痛は理解できたが、社会的・霊的苦痛は捉えられていない傾向がある。 (2) 家族の苦痛は、身体的・精神的苦痛を考えることはできたが、家族の心理までの考えに及んでいない。 (3) 終末期患者の思いに近づくような関わりの必要性には気づけていた。 (4) 家族援助の重要性や家族のニーズについて考えられた。 (5) カンファレンスで実習中には考えられなかったことに気づけた。



6. 瀬川睦子他 (2005)	K 大学医学部看護学科 3 年次、終末期実習を終えた 40 名	(1) 終末期看護実習到達度評価 (2) 自記式アンケート調査；共感経験尺度 (3)(1) と (2) の相関	終末期看護実習においての学生の学び： (1) 死について向き合うという経験が乏しい中で患者の看護を行ったことで、知識が広がり、日常生活援助の重要性に気づき、自分ができる援助を考えようとしていた。 (2) 実際の援助に関する実習到達度がやや低かったことから、終末期看護実習において患者の全人的な苦痛に向き合い、実践的な援助を行うことの困難さがうかがえた。 (3) 対症が抱える全人的な苦痛を理解することは、共感的に受け止めることができており、終末期看護実習において共有経験が高められたことがうかがえた。 (4) 共感性を促すことは、学生が患者の尊厳を保てるようなセルフケアの方法を選択できる患者援助の方向性につながり、対象の死生観や人生観を理解し、受け止めることを気づくことになる。 (5) その人らしさを尊重した援助について真正面から向き合っていることによって、わきおこる共感性が育成された。 (6) 生活援助の体験とそこでのコミュニケーションが死生観の発展に良い影響をもたらした、死生観構築と共感の育成につながっていた。
7. 玉川 緑他 (2005)	がん基幹病院附属看護学校 3 年生 4 名	終末期実習前・中・後に面接した内容を KJ 法で分類	終末期患者との関わりにおける看護学生の死生観形成過程において、死の恐怖を持っている看護学生の場合、《自己の死の自覚》、次に《死に向かうの生の存在の自覚》を認識していた。自己の死を受容していく過程の中で、《傍で寄り添う他者の存在》と《死の中で価値観の発見》が認められた。
8. 原田真澄他 (2005)	A 短期大学看護学科 1-2 年生 148 名（臨地実習体験なし、終末期看護の講義体験なし）	菊地・小代らの研究の 75 項目からなる自記式質問紙の一部を使用したアンケート調査	終末期看護への興味・援助意志に関する因子と独立して正の関連を示した要因は、「ささいなことは気にならない」性格と「死に対する自然で静穏なイメージ」であった。負の関連を示した要因は、「ペットの死の経験」であった。
9. 完山妙香他 (2005)	A 県内の 3 年課程の看護専門学校の 3 年生 125 名	自作の質問紙によるアンケート調査	終末期にある患者を受け持った学生の認知について： (1) 終末期にある患者を受け持った学生は、患者とのコミュニケーションや関わり方について不安を抱きつつも、意欲的に実習に取り組んでいた。 (2) 実習終了時にはこれらの不安が軽減し、「もっと患者の側にいたい」「充実した実習になった」と感じていた。 (3) 終末期看護実習における認知には、受け持ち患者の告知の状況によるもの、身体的状況の変化、精神的状況の変化、学生－患者関係が影響をおよぼしていた。
10. 稲本 ゆかり他 (2004)	看護学校 3 年課程 3 年次生 58 名	終末期看護実習において死別体験がある 3 名と死別体験がない 3 名のレポート分析	終末期看護実習の学び： (1) 死生観の形成における死に対する感情表現では、死別体験の有無により差が見られる。死別体験のある学生の方が患者の死やプロセスに大きな衝撃を受け、感情が揺れ動いている。 (2) 終末期の患者の受け入れられない学生の気持ちには違いがある。死別体験がある学生は、患者が死ぬということに対する受け入れが困難であり、死別体験のない学生は、病気が治って欲しいなどの死を意識する前の段階であった。 (3) 終末期看護実習後のレポート分析では、自己の死について表現するまでに死生観を深めることはできていなかった。 (4) 死生観の育成のためには、自己の生・死をみつめることが重要である。実習において自己の感情や価値観を表出する話し合いが必要である。

11. 石原由華 他 (2004)	N 看護短期大学 1 年生 85 名	がん患者の講演聴 講後のレポートの 内容分析	(1) レポート分析上の 7 つのカテゴリー：「T 氏と家族について」「ターミナル医療・看護について」「ターミナル患者と家族について」「聴講から考えたこと」「告知について」「T 氏に伝えたいこと」「自分がターミナル患者なら」 (2)(1) より、学生はターミナル患者と死に対するイメージ・不安・恐怖を肯定的に受け止めている。 (3) 学生は、講義によりターミナル患者のイメージを変化させていることより実習前の講演は教育として有効である。
12. 渋谷 えり子他 (2003)	看護学科 3 年生 12 名	(1) 実習日誌・実 習終了後の感想の 内容検討 (2) 尺度：不安と の関連要因に關する 自作のもの 11 項目についての自己 評価、STAI	実習中の実習姿勢に関しての変化： (1) 1 週目は消極的な姿勢と意欲的な姿勢の学生がいる。2 週目は患者の状態の変化に驚く反応を示した学生や心理的に辛くなった学生が多かったが、患者と関わりを持とうと努力する姿勢が見られた。3 週目は信頼関係が築けたり、役に立ちたいという積極的な姿勢であった。 (2) 特定不安、状態不安得点は標準得点より高かった。 (3) 実習初日は「看護計画に関する不安」「看護技術に関する不安」「看護との関係への不安」が高かった。2 週目は「精神的疲労感」「看護技術に関する不安」「看護との関係への不安」が高かった。3 回とも 4.0 以上の評価は「身体的疲労感」「精神的疲労感」「緊張感」の 3 項目であった。
13. 古市 めぐみ他 (2003)	N 短期大学 3 年 次生 20 人（実 習後）	肺癌患者の特別講 義後のレポートの 内容分析	(1) 学生の学び：「告知における理想の看護師像について」「人生について」「サポートシステムについて」「告知について」「化学療法による苦痛」「受け持ち患者への思い」の 6 つのカテゴリー (2) 実習では入り込めなかった患者の心理を深く理解できた。
14. 薬師寺 文子他 (2002)	成人・老年看護 実習終了した 3 年生 99 名	ビデオ鑑賞、グル ープカンファレンス 後の自由記載レ ポートの KJ 法に よる分析	(1) 学生の終末期看護にとっての必要な具体的内容としての学び：「社会資源の活用」「症状のコントロール」「看護者が自身の死を受容」「家族の不安や苦痛の理解」「患者・家族・医療者の人間関係」 (2) 学生は体験が無く自分の体験からの学びは少ない。 (3) 今後は、インフォームドコンセントを受けた、患者の心理を考察するような教育的関わりが必要である。 (4) ビデオ学習では内容の限界があり、患者の生や死の考え方や援助方法をイメージしにくかったと思われ、今後の教育方法の検討が必要である。
15. 丹下幸子 他 (2001)	終末期看護実習 での看取り体験 をした学生 4 名	実習記録、感想に 記述された内容の カテゴリー化	看取りをした学生の体験内容 (1) 共通な体験内容：く死に関連した不安の表出に対する迷いと困難×セルフケア不足に対する援助時の戸惑い×迫る死に対する葛藤×悔い・無力感×家族の悲しみに対する戸惑いと切なさ×別れの実感 (2) 個別的な体験内容：死への恐怖・嫌悪感
16. 薦田理佳 他 (2001)	終末期看護実習 (3 週目) 中の 3 年生 188 名	ビデオ鑑賞・ディス カッション後の レポートのカテ グリー分類	(1) 終末期看護のあり方についての学び：①死生観、②基本理念、③ケア・看護のあり方、④実習を通しての自身への評価、⑤今後の課題 (2) VTR・ディスカッションは学生が終末期看護を考え、学びを深める上で効果的である。
17. 本間 千代子他 (2001)	看護短大生 2 年 生 79 名、女子 大学生 1 年生 104 名	自記式アンケート 調査 Templer の死の不 安尺度を修正して 使用	(1) 看護短大生が「死の不安」得点が一般女子大生より高い (2) 「死の不安」はくよくよする人とそうでない人で有意差があり性格的な面も影響している。親しい人の死の経験の有無でも差があり外的環境からくる死の体験も影響している。 (3) 看護短大生は終末期看護ケアの授業後の「死の不安」得点は増加していた。

18. 二重作 清子他 (2001)	看護短期大学生 3年次 101名	実習終了後に提示 した事例のレポート 分析 KJ法、カテゴリー 化	(1) 事例からの学生の学びの5つのカテゴリー: ①患者・家族の 意思の尊重, ②死生観, ③苦痛軽減への援助, ④家族への援助, ⑤終末期看護のめざすもの (2) 教育方法として終末期看護について学習する場と意図的に設 けること, 学習効果が得られるような教員の積極的な関わりの 必要性
19. 園田まり 他 (2000)	看護専門学校学生 110名 1年生 35名 2年生 32名 3年生 34名	菊池の死のイメージ を修正して使用	(1) 学生の死のイメージは、「静的な」「自然的な」であり, また「親 しみにくい」「怖い」であった。

## 2) 研究方法

質的研究手法が11件であり, その内容はレポート・面接内容であり, 分析方法としては内容分析・KJ法と明記してあるものは少なく, 明記せずカテゴリー化したというものが多かった。量的研究手法が7件であり, 尺度を用いたものや研究者自身が作成した自記式アンケート調査であった。質的・量的の両者を含んだ研究手法が1件であった。

## 3) 研究結果

表3に対象とした研究概要のまとめを示した。まず, 死・終末期看護に関する学生の認識に関する研究が13件(68.4%)であった。そのうち臨床実習に関連する研究が9件(47.4%)であり, その内訳は, (1)実習中の患者・家族からの学びが2件(2007安藤<sup>43)</sup>, 2005新谷<sup>44)</sup>) (2)実習中の学生自身に焦点をあてたものが7件(2007穴澤<sup>45)</sup>, 2005瀬川<sup>46)</sup>, 2005玉川<sup>47)</sup>, 2005完山<sup>48)</sup>, 2004稲本<sup>49)</sup>, 2003渋谷<sup>50)</sup>, 2000丹下<sup>51)</sup>)であった。実習外のもの4件(21.0%)(2006糸島<sup>52)</sup>, 2005原田<sup>53)</sup>, 2001本間<sup>54)</sup>, 2000岡田<sup>55)</sup>)であり, 1～3年生へ死に対する考えや終末期看護への関心についてのアンケート調査であった。

次に, 終末期看護における教育的介入後の学生の実態・教育の効果に関する研究が6件(31.6%)であった。そのうち臨床実習に関連する研究が2件(15.5%)(2005佐々木<sup>56)</sup>, 2001

葛田<sup>57)</sup>)であり, カンファレンス指導にそう教育的介入や実習中のビデオ・ディスカッションという介入後の学生の学びであった。また, 講義の中での介入としてがん患者の講義後の学び2件(2004石原<sup>58)</sup>, 2003古市<sup>59)</sup>), その中での教育効果はあったと述べている。ビデオ学習後の学び2件(2002薬師寺<sup>60)</sup>, 2001二重作<sup>61)</sup>), その中での教育効果は, ビデオは内容の限界があり教育方法として検討が必要とするものや事例では学生に多くの学びがあったとしていた。

## IV. 考 察

### 1. 終末期看護における基礎教育の実態

A. デーケン<sup>62)</sup>は, 死の準備教育には4つのレベルで行われる必要がある。すなわち, 第1に専門知識の伝達のレベル(知識レベル), 第2に価値の解明のレベル(価値のレベル), 第3に感情的・情動的な死との対決のレベル(感情のレベル), そして第4に技術の習得(スキル・トレーニング)のレベル(技術のレベル)であると述べている。志田<sup>63)</sup>は看護基礎教育における死の準備教育の進め方で看護大学の1～4年次(3年過程看護専門で1～3年次)では, 知識のレベル・価値観のレベル・感情のレベルの教育が必要である。これらの上に3～4年次に技術のレベル, つまりターミナル期にある患者との具体的な関わりの技術の習得が必要である。つまり, ターミナル期の患者を受け持

つ臨床看護学実習を通じて、患者に関わる技術を習得していくことになる」と述べている。

今回対象とした文献を上記の4つのレベルで考える。まず石原<sup>64)</sup>、古市<sup>65)</sup>はがん患者自身による講演を授業の一環で実施し、学生はターミナル患者・家族についての理解や思い、ターミナル医療・看護について学んだ。実習では入り込めなかった患者の心理を深く理解できたと述べている。これは、知識のレベルと感情のレベルでの教育と言える。また、葉師寺<sup>66)</sup>、葛田<sup>67)</sup>は、実習終了後のビデオ鑑賞後に学生の学びが得られたと述べ、これも知識のレベルの教育と言える。そして、その後のグループカンファレンスで自分とは異なる他の学生の意見を聞き多様な考え方があることを知り、自分の考えを明確にする必要性が理解できたと述べ、これは価値観のレベルの教育と言える。

技術のレベルとしては、具体的なターミナル期にある患者とのふれあいを通した技術の取得が大切と言われ<sup>68)</sup>これが臨床実習にあたる。今回の対象では、安藤<sup>69)</sup>、新谷<sup>70)</sup>、瀬川<sup>71)</sup>らは実習での学生の学びを明確にしていた。研究対象の看護学生は3学年以上を扱ったものが73.7%と多数であり、実習との関連での研究が57.9%と多かった。実習の中で学生は終末期の患者・家族が実際どのような状態であるかを理解でき、自分自身の死生観や学習のあり方の振り返りができていた。穴澤<sup>72)</sup>は学生の学習過程の変化を示し、恐れという感情のレベルの体験後、教員の指導により患者を受容できケア行動という技術のレベルまで到達できたことを述べた。

これより、学内の講義・演習で得た知識・技術を実際の患者に対して実習という形で看護を

表3 対象とした研究概要のまとめ

( )は複数回答

死・終末期看護に関する学生の認識	13(68.4%)	実習	9 (47.4%)	(1) 患者・家族に関する学生の学び (2) 実習中の学生自身に焦点をあてたもの ①学習過程 ②学習過程に変化をもたらした要因 ③実習姿勢 ④死生観形成過程 ⑤看取り体験内容 ⑥実習全般の学び	2 7 (1) (1) (1) (2) (2) (2)
		実習以外	4 (21.0%)	(1) 死に対する考えや終末期看護への関心 (2) 死の不安 (3) 死のイメージ	2 1 1
終末期看護における教育的介入後の学生の実態・教育効果	6(31.6%)	実習	2 (10.5%)	(1) カンファレンス指導案に沿う教育介入後の学生の学び (2)VTR 教材・ディスカッションからの学び (3)VTR 教材・ディスカッションは効果的である	1 1 1
		講義	4 (21.1%)	(1) 患者の講演からの学び (2) ビデオ教材からの学び (3) 事例提示による学び (4) 実習前の講演の教育として有効あり (5) 実習では入り込めなかった患者の心理を深く理解できた (6) ビデオ学習は内容の限界があり、教育方法の検討が必要	2 1 1 1 1 1

実施することが基礎教育として重要であると言えた。しかし、実習は、技術レベルというだけではなく、実際の患者・家族への看護を通じて4つのレベルの内容を体験しつつ学んでいるとも考えられる。つまり、終末期看護における基礎教育ではデーケンの言う4つのレベルまたは、それらを統合した形で実施されていると考える。

## 2. 終末期看護に関する基礎教育の方法

### 1) 終末期看護に関する基礎教育における実習の意義

今回の結果では、実習に関する研究が多かった。これは、実習で実際の終末期の患者・家族への看護を体験することにより学習効果が大きかったことによると考えられる。つまり看護教育は、臨地実習という既修内容の統合とその内容を活かした発展学習を目指す<sup>73)</sup>という特徴的な教育方法を取り、その比重が大きいからである。学生は、ホスピスという特殊な環境において患者との相互作用の中で自己概念を揺るがすほどの実習体験をしていた<sup>74)</sup>という報告もあった。このことより、終末期看護における基礎教育では実習の意義は大きいと考える。

### 2) 終末期看護における教育的介入の実態

効果的な教育的介入を考えると実習での指導案の作成<sup>75)</sup>や視聴覚教材<sup>76)</sup>、それを通しての学生間のディスカッション<sup>77)</sup>など工夫がされていた。また、講義ではがん患者を講師としての講演<sup>78)79)</sup>、事例提示後に学びの共有化<sup>80)</sup>がなされていた。しかし、視聴覚教材での評価も一定ではなく内容に限界があり教育方法として検討の余地があると述べていた。がん患者を講師とする介入では、患者自身・その思いの実際を知り、学生ががん患者をイメージし全体像を理解するには有効であるが、患者が終末期の初期の段階の講師であると最終段階の患者の変化やその時期に応じた看護の理解は困難である

とも述べている。

また、教育の時期も重要であるように思われる。石原<sup>81)</sup>、古市<sup>82)</sup>は1年生と3年生の看護学生にがん患者を講師とした講義後のレポート分析をしている。その中で1年生でもターミナル患者と死のイメージ・不安・恐怖を肯定的に受け止められる。また、実習終了後の3年生では実習では入り込めなかった患者の心理に深く理解できたと述べている。このことより文献による知識を講義するよりもがん患者を講師とする教材は有効と考えられる。しかし、尺度などを用いて調査はされていないため教育の時期の有効性を論じるには限界があると思われる。

## 3. 終末期看護における基礎教育の課題と展望

今回の文献考察では、実習中の学生の学習過程<sup>83)</sup>、死生観形成過程<sup>84)</sup>などの研究はされていたが、学内の講義・演習と臨地実習を通しての学生の縦断的な変化の研究はなかった。また、学習効果を評価する一般的な尺度を使用した研究が少なく、研究者自身で作成された尺度であるため他施設との比較がしにくく、教育介入後の学習効果を一般化するには限界があると考えられた。これらより、学生の終末期看護に関しての実態を広い範囲で知る必要があり、学生の評価・学びの検討のために尺度の開発も必要であると言える。

次に、教育の方法・内容に関して考える。的場<sup>85)</sup>は、ターミナルケア実習において「看護場面の再構成」を学習過程が促進する1つの手法として用いることは、患者理解とケアのあり方の学びを深め、看護者としての自己の成長やグループダイナミックスの向上にもつながると述べている。また、庄司<sup>86)</sup>はスモールグループによる自由討論という教育方法を実習の一部に施行し講義形式よりも討論形式が優れていると述べている。次に高谷<sup>87)</sup>は、学生が記述し

た悩み・困難を明らかにし、学習者のニーズに応じてケアの具体的方法・手段・技術の不足を強化する必要を感じ、実技演習・グループワーク・体験学習を実施した。これらのことより学生は終末期患者の看護における具体的ケアの方法に関心を向けることができたと言っている。このように教育方法・内容・その評価は模索している状態であり、学生が主体的に学べるように教材の研究とその教育的介入後の分析を積み重ねていく必要がある。

つまり学生はこれらの終末期看護における基礎教育を体験することにより個性・尊厳ある人間、それに対する看護の本質を理解することができると考える。これは、小澤<sup>88)</sup>が、看護教育における“いのちの教育”とは、患者・家族とともに苦しむ看護師が、苦しみを抱えながら援助を行い続ける真の力をもった看護師になるための教育であると述べていることと合致すると考える。

今回は、医学中央雑誌のみの文献を分析対象としたため対象数も限られており分析が充分ではなかった。次回は検索のベースを広げ、どのような教育が実施され効果的であるかを詳細に分析し、実践につなげたい。

## V. ま と め

以上より、今回の研究の現状と今後の課題は次のように言える。

1. 研究概要では、死や終末期看護に関する学生の認識を示した研究が68.4%、その内訳は実習に関連したものが47.4%、それ以外のものが21.0%であり、実習に関連した研究が多かった。そして、終末期看護における教育的介入後の学生の実態と教育効果を示した研究が31.6%であり、教育的介入に関連した研究は少なかった。
2. 学生は、実習において、患者・家族への看

護の実際を通しての学びが大きかった。

3. 基礎教育では、終末期看護に関しての学内での講義から実習というカリキュラム上での体系的な教育の必要性は論じられているが、教育方法・内容・評価は模索の段階である。

## VI. 引用文献

- 1) アルフォンス・デーケン：死の準備教育 死を教える，メヂカルフレンド社，1986，161-162
- 2) 前掲載1) 177
- 3) 古市めぐみ，堀容子，滝益栄他：終末期看護における教育方法の検討，日本赤十字愛知短期大学紀要，14：133，2003
- 4) 木澤義之：多職種教育カリキュラムのねらいと課題，ターミナルケア，12：177-182，2002
- 5) 古屋洋子：看護学生の死生観，山梨県立看護大学短期大学部紀要9(1)：115-129，2004
- 6) 糸数陽子：死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較—，京都市立看護短期大学紀要，30：146-147，2005
- 7) 高島安代：学生の死に関する意識調査，瀬戸内短期大学紀要，36：75-82，2005
- 8) 豊田妙子，斉藤好子：看護学生の死に対する認識変化の要因，三重看護学誌，3(1)：147-154，2000
- 9) 山崎裕二：看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1)，日本赤十字蔵野短期大学紀要，15：89-96，2002
- 10) 落合清子，長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化～読書による死生観確立への影響について～，聖隷クリストファー大学紀要，27：7-13，2004
- 11) 丹下幸子，金子昌子，細矢智子：終末期

- 看護実習における看取りの体験—実習記録および感想文の分析をとおして—, 看護教育, 31: 206-207, 2000
- 12) 倉持重美: 終末期患者とのかかわりをもっている, 患者から信頼される看護師が考える良いかかわりとは何か, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 53: 287-293, 2008
- 13) 兼宗美幸, 長谷川真美, 横山恵子他: 看護師のキャリア発達の意識と継続教育の情報に関する一考察, 日本看護学会論文集看護教育, 35: 226-228, 2005
- 14) 吉田津矢: 病院における高齢者の死のありよう 看護職者の体験の分析, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 25: 388-393, 2000
- 15) 岡部朋子: 「その人らしさを尊重した看護」に関する看護婦の意識 終末期看護に焦点をあてて, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 24: 21-26, 1999
- 16) 川瀬みさ子: 救命領域で死にゆく患者とその家族に関わる看護婦のジレンマ, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 24: 502-508, 1999
- 17) 岩瀬恵美, 茶園美香, 飯塚哲子: 終末期患者とのコミュニケーションについての学び 終末期看護演習・実習を通して, 日本がん看護学会誌, 20: 77, 2006
- 18) 原頼子, 瀬川睦子, 田中恵子他: 終末期看護実習における看護大学生の学びの分析, 日本看護教育学会誌, 17: 111, 2007
- 19) 原頼子, 瀬川睦子: 終末期看護における個を尊重した援助の意義 学生の終末期看護実習のレポートから, 日本看護科学学会学術集会講演集, 26: 332, 2006
- 20) 糸島陽子, 古屋佳子: 終末期看護実習での学生の葛藤 何もできない無力感から終末期看護の学びを得るまで, 日本看護科学学会学術集会講演集, 26: 331, 2006
- 21) 稲本ゆかり, 樋口美佳, 中村佐知: 終末期看護実習における看護者としての学び—実習後のレポートの内容分析から—, 死の臨床, 28(2): 235, 2005
- 22) 羽毛田博美, 櫻井成美, 小野由貴子: 終末期看護実習での学びと課題, 死の臨床, 28(2): 239, 2005
- 23) 羽毛田博美, 櫻井成美, 小野由貴子他: 本校における終末期看護の学びと課題 死生観のまとめとスピリチュアルケアの学びより, 日本農村医学会雑誌, 54(3): 469, 2005
- 24) 中村鈴子: 成人看護学実習(終末期看護)における看護学生の学びの変化, 日本看護学教育学会誌, 15: 114, 2005
- 25) 金子昌子, 黒木淳子, 鈴木純恵他: 終末期看護学実習における学生の学び 感想文の内容分析をとおして, 日本看護学教育学会誌, 14: 203, 2004
- 26) 茶園美香, 岩瀬恵美: 終末期看護実習における学生の学びの変化 「ホスピス / 緩和ケア病棟」と「大学病院」別分析から, 死の臨床, 26(2): 213, 2003
- 27) 岩瀬恵美, 茶園美香: 終末期看護実習における学生のコミュニケーションの学びの実態, 日本がん看護学会誌, 17: 97, 2003
- 28) 茶園美香, 岩瀬恵美: 看護学生の終末期看護実習における「死生観」に関する学びについて 実習記録及びレポートの分析から, 臨床死生学, 7(1): 108, 2002
- 29) 竹内裕美子, 森一恵: 終末期看護学実習における看護学生の困難や悩みと対処方法, 日本看護研究学会雑誌, 30(3): 110, 2007
- 30) 岩瀬恵美, 茶園美香, 飯塚哲子: 「大学病院」と「ホスピス / 緩和ケア病棟」における



- 終末期看護実習での学生の戸惑いと対処の実態, 死の臨床, 27(2): 234, 2004
- 31) 岩瀬恵美, 茶園美香, 高橋晴美: 終末期看護実習における学生の戸惑いと対処の実態, 日本がん看護学会誌, 18: 85, 2004
- 32) 岩瀬恵美, 茶園美香: 終末期看護実習における学生の戸惑いの実態と指導上の課題, 死の臨床, 25(2): 151, 2002
- 33) 茶園美香, 岩瀬恵美, 高橋晴美: 看護基礎教育における終末期看護実習の成果 学生の「死生観と終末期患者に接する姿勢の変化」に焦点をあてて, 日本看護学教育学会誌(13): 115, 2003
- 34) 茶園美香, 岩瀬恵美, 廣岡佳代: 看護学生の終末期看護演習・実習の変化と影響要因について 終末期患者に関わる態度の側面から, 日本がん看護学会誌, 22: 137, 2008
- 35) 寺田敦子, 瀬川睦子, 原頼子: 終末期看護における看護学生の実習修得度と共感性の関連, 日本看護研究会雑誌, 27(3): 80, 2004
- 36) 岩瀬恵美, 茶園美香, 飯塚哲子: 終末期看護に関する学内演習および臨床実習の意義について 学生の「死のイメージの変化」による検討, 日本看護科学学会学術集会講演集, 24: 446, 2006
- 36) 新井美智子, 佐藤順子, 田嶋幸子: 終末期看護における看護学生への実習指導を考える 臨地実習前後の死生観の比較から, 日本がん看護学会誌, 20: 201, 2006
- 37) 澤井美穂, 安藤詳子: 終末期看護学実習における教員の役割—疼痛緩和を中心に関わった一事例, 死の臨床, 28(2): 228, 2005
- 38) 茶園美香, 岩瀬恵美, 飯塚哲子: 終末期看護に関する学内演習および臨床実習の意義について 学生の「死のイメージの変化」による検討, 日本看護科学学会学術集会講演集, 24: 446, 2004
- 39) 山田皓子, 井上京子, 沼沢さとみ: 終末期看護論のレポート分析に基づく講義内容の検討, 日本看護学教育学会誌, 15: 286, 2005
- 40) 三好さち子, 細野容子, 松本睦子: 授業「終末期看護」前後の終末期のイメージ 授業前後のイメージマップから, 死の臨床, 26(2): 213, 2003
- 41) 木下みゆき, 中村和代, 竹元仁美他: 終末期看護における授業展開 ホスピス見学実習をおこなって, 聖マリア医学, 27(1): 75, 2002
- 42) 本間千代子, 中川禮子: 終末期看護ケアの授業と看護学生の死の不安の認知, こころの健康, 15(1): 84-85, 2000
- 43) 安藤恵子, 百々晃代, 富樫和代他: 成人看護学終末期実習におけるレポートからみた看護学生の学び, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 3: 224-227, 2007
- 44) 新谷奈苗, 守本とも子: 終末期看護学実習による看護学生の終末期看護についての意識変化, 日本医学看護学教育学会誌, 14: 50-56, 2005
- 45) 穴澤加代子, 河合節子, 菅谷千恵子他: 終末期看護実習における学習過程 非構造化面接により, 心理面への援助の学習に焦点をあてて, 旭中央病院医報, 29: 14-17, 2007
- 46) 瀬川睦子, 原 頼子: 終末期看護実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導, 川崎医療福祉学会誌, 15(1): 141-147, 2005
- 47) 玉川 緑: 終末期患者との関わりにおける看護学生の死生観形成過程, 日本看護学会



- 論文集・看護総合, 36: 511-513, 2005
- 48) 完山妙香: 看護学生の終末期看護演習における認知の分析, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 30: 69-76, 2005
- 49) 稲本ゆかり, 樋口美佳, 中村佐和子: 終末期看護実習における学び 実習後レポートの内容分析から, 神奈川県立病院付属看護専門学校紀要, 9: 32-38, 2005
- 50) 渋谷えり子, 森田美穂子: 終末期癌患者を受け持った学生の実習姿勢の分析, 埼玉県立大学短期大学部紀要, 5: 61-69, 2004
- 51) 前掲載 11)
- 52) 糸島陽子, 植村小夜子, 二村有香他: 看護学生の死生観と終末期看護への関心, 日本看護学論文集: 看護教育, 37: 392-394, 2007
- 53) 原田真澄, 堀 容子, 高須美香他: 看護学生の死に対する態度に関連する要因 死のイメージ, 性格, 死の経験との関連から, 日本看護医療学会雑誌, 7(2): 17-26, 2005
- 54) 本間千代子, 中川禮子: 終末期看護ケアの授業と看護学生の死の不安認知, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 14: 37-42, 2001
- 55) 岡田まり, 片岡智子, 吉岡多美子他: 看護学生の死のイメージに関する研究, 三重看護学誌 3(1): 53-59, 2000
- 56) 佐々木順子, 安藤恵子, 東谷みゆき他: 成人看護学実習(終末期看護)におけるカンファレンスでの学生の学び, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 1: 101-107, 2005
- 57) 蔦田理佳, 堀井たづ子: 看護学生の終末期看護学習における VTR 視聴とディスカッションによる学習効果, 京都府立医療技術短期大学部紀要, 11(1): 85-90, 2001
- 58) 石原由華, 滝益栄, 甲村朋子他: 終末期看護における教育方法の検討 終末期患者の体験談聴講後のレポート分析を通して, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 15: 53-59, 2004
- 59) 古市めぐみ, 堀容子, 滝益栄他: 終末期看護における教育方法の検討 肺癌患者による特別講義を導入して, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 14: 133-138, 2003
- 60) 薬師寺文子, 二重作清子: 終末期患者の看護について理解するための教育方法の検討 VTR 観賞後のレポート分析, 臨床死生学, 7(1): 40-47, 2002
- 61) 二重作清子, 薬師寺文子, 横路洋子: 看護学生の終末期看護における教育方法の検討 (その1) 事例提示によるレポートの分析, 人間と科学: 広島県立保健福祉大学誌, 1(1): 39-49, 2001
- 62) 前掲載 1) 3-6
- 63) 志田久美子, 山本澄子, 渡邊岸子: 看護基礎教育における「死の準備教育」についての検討, 新潟大学医学部保健学科紀要, 8(3): 137, 2007
- 64) 前掲載 58)
- 65) 前掲載 59)
- 66) 前掲載 60)
- 67) 前掲載 57)
- 68) 前掲載 63)
- 69) 前掲載 43)
- 70) 前掲載 44)
- 71) 前掲載 46)
- 72) 前掲載 45)
- 73) 田島桂子: 看護実践能力育成に向けた教育の基礎, 医学書院: 193, 2004
- 74) 大町福美, 竹元仁美, 定村美紀子他: 看護学生のホスピス実習体験の意味の探求, 聖マリア学院紀要, 17: 150, 2002
- 75) 前掲載 56)

- 76) 前掲載 60)
- 77) 前掲載 57)
- 78) 前掲載 58)
- 79) 前掲載 59)
- 80) 前掲載 61)
- 81) 前掲載 58)
- 82) 前掲載 59)
- 83) 前掲載 45)
- 84) 前掲載 47)
- 85) 的場典子, 酒井禎子, 外崎明子他: ターミナルケア実習における「看護場面の再構成」による学生の学びの分析, 聖路加看護大学紀要, 22: 86-92, 2001
- 86) 庄司進一: 医療従事者となる学生のためのターミナル教育, 看護教育, 49(11): 838-841, 2008
- 87) 高谷真由美, 黒木淳子, 青ききよ子: 看護基礎教育における終末期看護の教育方法の検討, 日本看護研究学会雑誌, 20(3): 236, 1997
- 88) 小澤竹俊: ホスピス発の“いのちの授業”看護教育にとって, いのちの教育とは, 看護教育, 49(11): 1030-1034, 2008

## An Examination of Literature about Basic Education in Terminal Nursing Care

Mariko Sonoda, Mitsuyo Uehara

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : basic nursing education, terminal nursing care, practice,  
education method

### Abstract

Literature was examined to gain an awareness of the reality and clarify the issues of basic education in terminal nursing care. The examination produced the following results.

1. Literature accumulated in Ichushi(Japan Central Medical Review) during the decade between 1999 and 2008 was searched for keywords "nursing education" and "terminal nursing care." Out of 54 hits, an analysis was made of 19 documents aimed at and authored by nursing students.
  2. Of the 19 documents, 68.4% covered students' cognition of death and terminal nursing care. Of that percentage, 47.4% discussed nursing practice and 21.0% discussed other matters, indicating a large proportion of research on the practice of nursing care. The remaining 31.6% discussed the reality of students after educational intervention and the effectiveness of the education, indicating very little research on educational intervention itself.
  3. In many cases students learned through the practical experience of providing nursing care for terminally ill patients and their families.
  4. While the necessity for a systematic basic education curriculum in terminal nursing care that progresses from on-campus lectures to practice is frequently discussed, education methods, contents and assessment remain to be sought.
-